

個人タクシー

作：イーストリバー

【舞台】

タクシー

【装置】

椅子を正面に向けて、横に二つ並べる。
いわば運転席と助手席。

【キャラクター】 2名

運転手（男）

乗客（男）

タクシーを流している運転手。

上手より乗客が、腕時計を気にしながらせわしなく出てきて手を上げる。

タクシー止める運転手。

乗客、後部座席のドアが開くのを待つが、開かない。

乗客「え、ちよつとなに、開かないの？」

運転手、前の助手席に乗れと合図。

乗客「え？ 前？ なんでよ」

運転手、助手席側の窓を下げる。そこからのぞいて言う乗客。

乗客「なんで前なの。後ろ空いてるじゃないの」

運転手「前へご乗車ください」

乗客「わけわかんないな、後ろでいいでしょうよ」

運転手「前へご乗車ください」

乗客、仕方なくドアを開けて助手席に乗り込む。

乗客「しょうがねえな・・・」

乗客、後部席を気にして、

乗客「なんで後ろ乗せてくんないの」

運転手「ご乗車ありがとうございます」

乗客「いやそれはいいんだけど、なんで後ろに座らせないんだつての。こっち一人なのに」

運転手「他のご乗客の方のご迷惑になりますので」

乗客「他の乗客？（振り向いて）え、なに、誰か乗ってんの？ 怖いこと言わんでよ」

運転手「乗ってませんよ」

乗客「幽霊とか乗せてるとか言わないよね？」

運転手「乗ってません。お客様だけです」

乗客「じゃあなんで」

運転手「どちらの駅まで」

乗客「話聞いてないなこの人。駅？ なんで駅限定なのよ」

運転手「どちらまで」

乗客「聞いてねえなほんとに。新宿。急いでるからね」

運転手「新宿駅ですね」

乗客「だからなんで駅なんだよ。新宿だよ普通に。三丁目。で

ね？ 途中で高田馬場寄って欲しいんだわ。駅の近くのビルなんだけどそこで一旦書類受け取ってから新宿向かうから。とりあえず高田馬場向かって」

運転手「高田馬場駅ですね」

乗客「駅じゃねえよ。いや駅近だけでも。ちょっとさ（腕時計示して）急いでるんだよ。行ってちょうだいとかく」

運転手「わかりました。では発車します」

♪ 田端駅の外回り発車チャイムが鳴りだす。

乗客「え、何これ」

運転手「田端駅外回りの発車チャイムです」

乗客「え？」

運転手「山手線の」

乗客「山手線？」

運転手「お客さん、ここ田端から乗られましたもんね」

乗客「確かにここは田端一丁目だけど・・・山手線なのこれ？」

運転手、何やらうさんくさい指差し確認をして、タクシーを発車。

乗客「指差しとかしちやって・・・って、あら？」

頭に触れた何かを見て、

乗客「吊り革？　なんでこんなところに吊り革があるの？」

運転手「あ、吊り革におつかまりください」

乗客「吊り革に？　シートベルトじゃないの？（周り見て）え、

シートベルトないじゃないのこの車」

運転手「吊り革におつかまりください」

乗客「山手線かよ（吊り革に所在なくつかまって）わけわかんないわ」

アナウンス「次は、西日暮里・・・」

乗客「西日暮里？　ちよっ、ちよっちよ、ちよっと待って」

タクシーを止める運転手。

乗客「なんで西日暮里向かってんの」

運転手「田端の次は西日暮里ですから」

乗客「だから山手線か。こっちは高田馬場経由で新宿行きたいんだよ？　逆方向じゃないの」

運転手「仕方ないでしょうお客さん」

乗客「なんで」

運転手「これ外回りですから」

乗客「山手線かつ。え、何？　外回りって遠回りじゃねえか新宿まで」

運転手、すっ……と乗客を指で差す。

運転手「（フツと笑って）わかっていますねお客さん」

乗客「わかるよそれくらいは！。あのね、こっちは急いでんだよ」

運転手「ではこうしましょう。東京駅まで行って、そこから新宿まで快速で行きます」

乗客「中央線か！ てか、高田馬場行けねえじゃねえかよ！」

運転手「しょうがないですね・・・では、内回りにしますか」

乗客「最初からそうしろよ」

運転手「特別ですよ？」

乗客「普通だろ」

運転手「今日だけですよ？」

乗客「当たり前だわ。こんな二度と乗るか、今日だけだわ。てか急いでるんだからねこっちは」

運転手「発車しまーす」

プワーン！とクラクションを鳴らす運転手。
飛び上がる乗客。

乗客「びっくりした・・・クラクションまで改造してんのかよ？

山手線か？」

運転手「いえ、これは池上線ですね」

乗客「池上線かよっ。そこは山手線じゃないのかよ。またローカルだな私鉄って・・・JRじゃないのかよ」

運転手「JRじゃないですね」

乗客「なに」

運転手「国鉄です」

乗客「古いなっ。いつのだよもう・・・それよりなんで助手席なの。電車って普通、こう、車両分かれてるでしょう」

運転手「後ろはシルバーシートなんで」

乗客「シルバーシート！　言ったねえ！　昔シルバーシートって言ったねえ！・・・今は優先席だけだねっ」

運転手「国鉄ですから」

乗客「そこはこだわりがあるんだ？ 国鉄時代の山手線なわけ
ね？」

運転手「いえ、今この瞬間は、銀座線です」

乗客「なんで」

運転手「（得意そうに）・・・シルバーシート・・・だけに」

運転手、勝手に嬉しそうに笑って、乗客を小突く。

運転手「お客さんたらもうっ・・・人が悪いっ」

乗客「私は悪くないよ！ シルバーシートで銀座線か！ なんだ

よ普通にうまいな！ それ言いたくてこっち座らせたんだ
ろ！」

運転手「いえいえ、こうして仲良く話せるじゃないですか」

乗客「望んでないわトークとか。急いでるんだからね・・・変なものに乗っちゃまったなあ（と、あたりをキョロキョロ伺う）」

運転手「どうしましたお客さん」

乗客「隠しカメラとかないかなって・・・あれじゃないだろね、ほら、人間観察なんとかっていう番組の・・・そうそうモニタリング」

運転手「リニアモーターカー？」

乗客「どうすりゃそうなるんだよ、無理があんだろっ・・・ああなんだ、あれか、いわゆる電車オタクってやつか」

運転手「まあそうですね。実は・・・山手線の運転士になりたかったんです」

乗客「なれなかったの」

運転手「はい・・・」

乗客「なんで」

運転手「（フツと笑って）そうですねえ・・・」

乗客「あ、言わんでいいわ。大体わかるわもう」

運転手「お客さんは何線の運転士になりたかったんですか？」

乗客「なりたくないわっ。勝手にシンパシー作ろうとすな。思ったこともないわ」

運転手「（フツと笑って）かわいそうに……」

乗客「哀れむな勝手に。イラツとするわ……まあね、ぶっちゃけあんたみたいにそこまで好きなものがあるってのはいいことだし羨ましいとは思うよ。私なんてそういうのないからね。仕事仕事で……ま、あえてなるとしたら、新幹線の運転士がいいかなっ」

運転手「新幹線ですか」

乗客「そう。なんたって日本の鉄道の最高峰でしょう。旅客機みたいなものだからねあそこまで行くと。あの運転士ってやっぱエリートなんですよ」

運転手「まあそうですね。実は私……去年まで新幹線の運転士だったんです」

乗客「嘘でしょ！」

運転手「本当です。東京博多間」

乗客「山手線になれなくて新幹線になれたの？ エリートなん

じゃないの。なんで辞めちゃったの」

運転手「辞めたんじゃないよ・・・クビになりました・・・」

乗客「なんで・・・」

運転手「（フツと笑って）そうですね・・・」

乗客「ああ言わなくていいいい、大体わかるわ」

車内アナウンスが流れる。

アナウンス「次は駒込・・・」

乗客「え、駒込っ？」

運転手「ええ、田端の次は駒込ですから」

乗客「山手線か！ いちいち止まる気か！」

運転手「はい。内回りになりましたから」

乗客「だから山手線か！ これタクシーでしょ。高田馬場まで各駅に寄るつもりなの？ 巣鴨大塚池袋って……遠回りじゃねえかよっいい加減にしろ！」

と、運転手を小突く乗客。

運転手、ハツとなつて、

運転手「お客さん、暴力はいけません。ちよつと駅員室まできてもらえますか」

乗客「今度は駅員か！」

運転手「お客さん……酔ってますね？」

乗客「酔ってねえよ！」

運転手「自分は酔ってます」

乗客「飲酒運転じゃねえか！ なら合点がいくな！」

乗客「自分に酔ってます」

乗客「そっちかよ！ それも合点がいくわ！」

運転手「警察に連絡します」

乗客「上等じゃねえか、やってみろ（と、また小突く）」

運転手「あ、お客さん！」

乗客「なんだ！」

運転手「痴漢は犯罪です！」

乗客「駅のポスターか！ どこが痴漢なんだよ今の！」

運転手「痴漢は犯罪です！」

乗客「その顔で言うな！ もういい、付き合いきれないわ！ 次

の駒込で降りる！」

運転手「それまたどうして」

乗客「駒込から電車乗るわ！」

運転手「山手線か！」

おわり